

2026年1月28日  
キャンパスライフセンター  
(キャリア担当)

## 2025年3月卒業・修了生に対するキャリア教育アンケートの集計結果について(ご報告)

### I. 実施目的

学生の就職活動は、オンラインサービスの台頭を受け生成 AI を活用した就職活動準備や就活エージェント、スカウト型求人サイトなど様々な支援サービスが世間一般に幅広く普及しました。これに加え、人材不足による「就職活動の早期化」や「DX 人材の育成」など外部環境の変化に応じたキャリア教育対策も学内で検討する必要が生じております。つきましては、次年度就職活動を控える学生へのキャリア就職支援業務や低学年次の学生に向けたキャリア教育の改善点を確認するため、2024年3月に卒業・修了した卒業・修了生へアンケートの協力を求めました。このアンケートについてご報告いたします。各学部・研究科においてキャリア教育、就職支援への改善にお役立てください。

### II. 実施対象者

2025年3月に卒業・修了し、進路決定届で「就職」を選択し、かつ、卒後3年以内のアンケートにメールアドレスを活用することを同意してくれた、卒業・修了生(医学部を除く3,653名)

### III. 目標とする有効回答率と実際の有効回答率

- (1) 目標値 : 送信対象者の8%以上
- (2) 実績値 : **448名(回答率: 12%)** 内訳: 学部卒業生441名 修士修了生7名

### IV. 実施期間

2025年12月15日(月) ~ 2026年1月12日(月)

### V. 実施方法

メールを送信し Forms にて回答

### VI. 結果の共有と公表

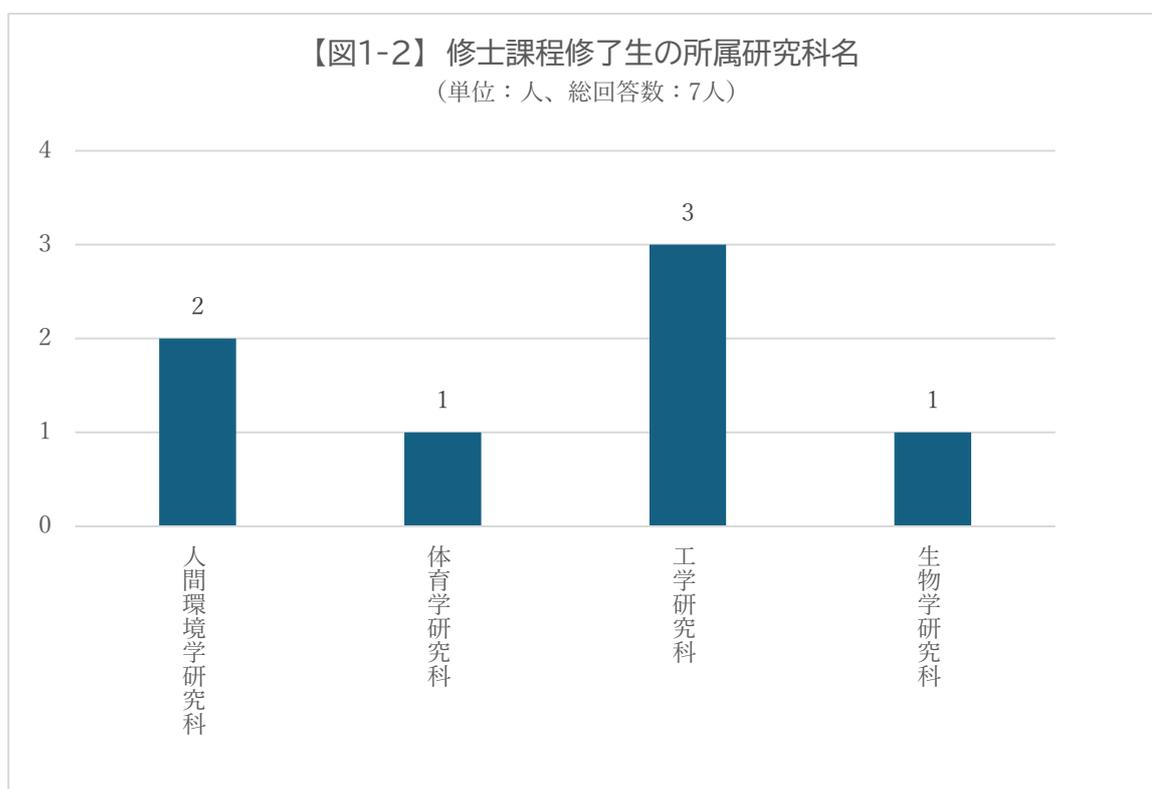
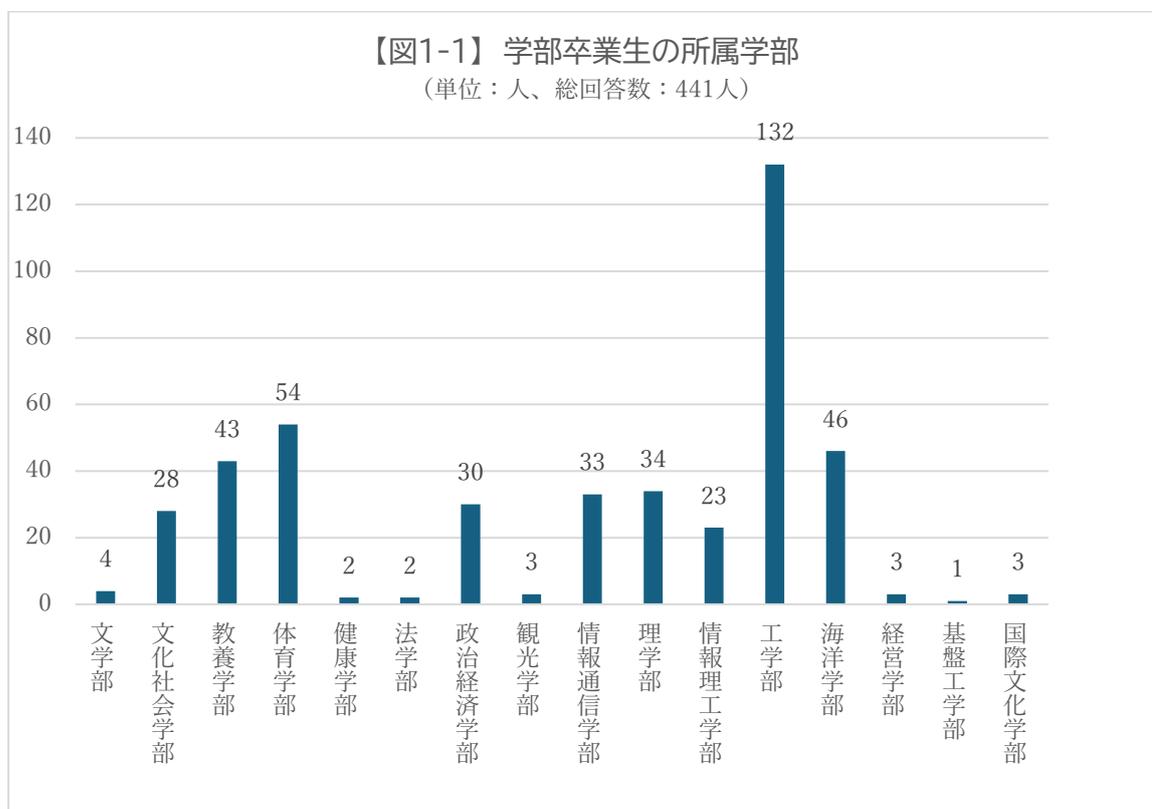
2025年度第3回キャリア就職幹事会、第5回キャリア就職委員会にて結果の共有を行い、東海大学オフィシャルホームページにて概要結果の公表を行う

### VII. アンケート項目

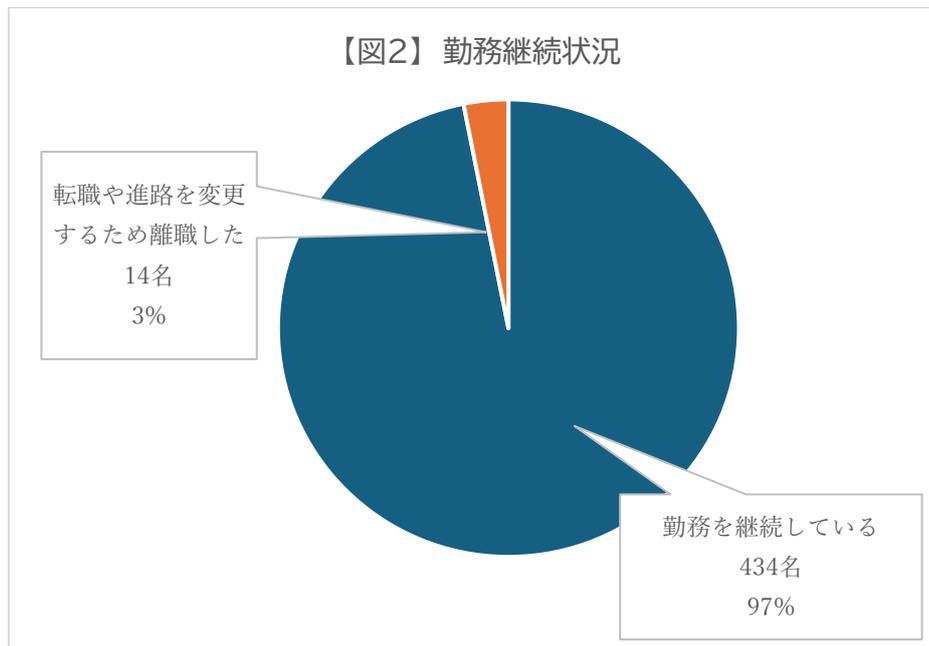
別紙「東海大学 卒業生へのキャリア教育アンケート項目(決定版)」を参照

## VIII. アンケート調査結果

### 1. ご卒業・修了された所属学部・研究科を選んでください



## 2. 卒業・修了後に入職した企業・団体で勤務を継続していますか？



■**離職理由**： 社風が合わなかったため／社風と仕事内容が合わなかったため／入社前に案内された業務内容・配属と相違があったため／会社全体がとてもまずい職場だったのと自分が思い描く未来や理想と遠くかけ離れていたため／祖母の介護と職場の雰囲気が合わなかった／先方から打診を受けたから／セクハラ／引っ越し／拘束時間と体質の問題／傷病／適応障害を発症したため／適応障害になった為／メンタル／未回答

■**再就職支援**： 本学に再就職支援が必要かを確認したところ、14名中、2名の卒業生・修了生から希望がありました。この2名は、速やかに「株式会社ジェイック」が行っている第二新卒プログラムをご案内済です。

### 【考察】

今回の調査では、2025年3月卒業・修了生の離職率は3%となり、厚生労働省が2025年10月24日に公表した「新規学卒就職者の離職状況」の大卒1年目離職率10.6%と比較して大幅に低い水準であることが示されました。

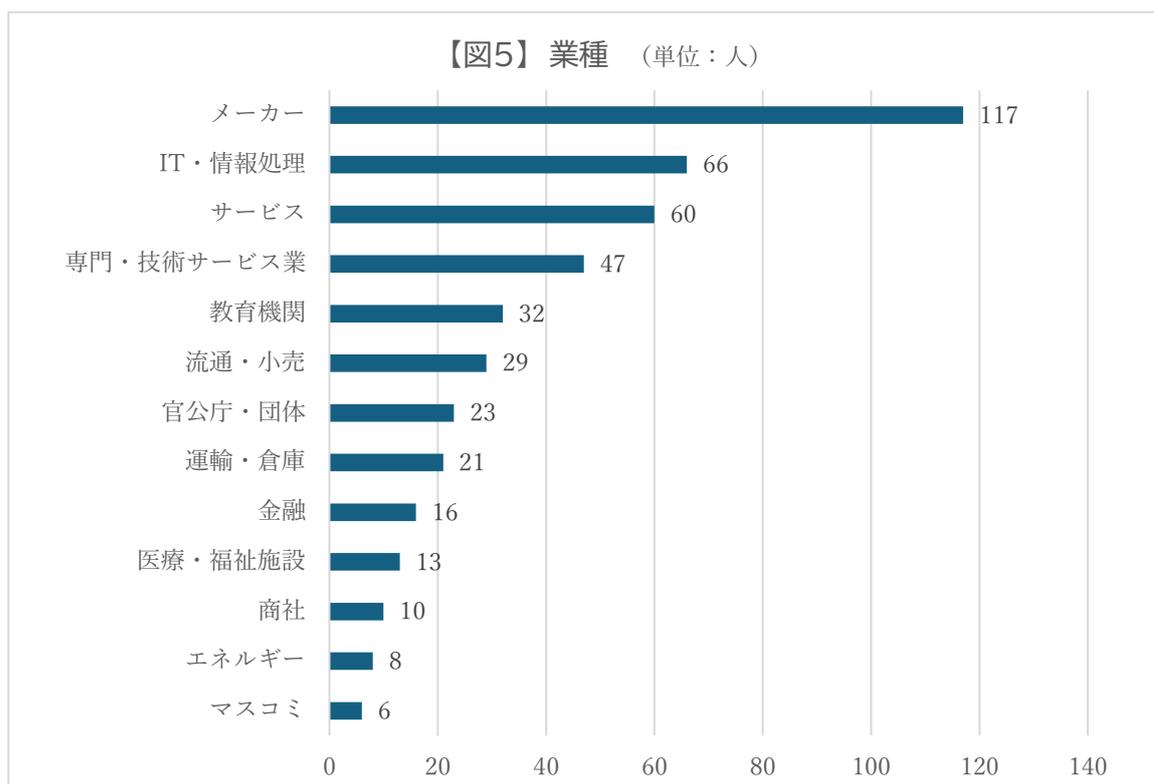
この低い離職率は、本学卒業生と企業の良いマッチングを示唆する一方、「社風が合わなかった」「思い描く未来や理想と遠くかけ離れていたため」等の離職理由から、昨今の就職活動の早期化に伴い、学生側が効率（タイパ）を重視して早期に活動を終えようとするあまり、深い企業研究に至らないケースや、企業側が売り手市場において採用競争力を高めるために魅力を強調しすぎる傾向による、入社後の「ミスマッチ」が生じ、適応障害などの心身の不調にも繋がっている卒業生が一定数居る事が伺えます。

今後はミスマッチを未然に防ぐため、就業体験や企業説明会で「実際の仕事の厳しさ」や「勤務地・職種がどのように決まるのか」という具体的な実態を確認するよう、学生への指導が必要と考えます。

### 3. 現在、勤務している都道府県はどこですか？

都道府県名	人数	都道府県名	人数	都道府県名	人数	都道府県名	人数	都道府県名	人数
北海道	7	埼玉県	11	岐阜県	1	鳥取県	1	佐賀県	0
青森県	1	千葉県	25	静岡県	22	島根県	0	長崎県	0
岩手県	2	東京都	156	愛知県	15	岡山県	0	熊本県	3
宮城県	2	神奈川県	125	三重県	2	広島県	2	大分県	1
秋田県	2	新潟県	6	滋賀県	0	山口県	2	宮崎県	0
山形県	0	富山県	2	京都府	4	徳島県	0	鹿児島県	0
福島県	6	石川県	1	大阪府	7	香川県	2	沖縄	1
茨城県	8	福井県	1	兵庫県	3	愛媛県	1	詳細不明・未決定	6
栃木県	7	山梨県	1	奈良県	0	高知県	0		
群馬県	2	長野県	4	和歌山県	0	福岡県	6	合計	448

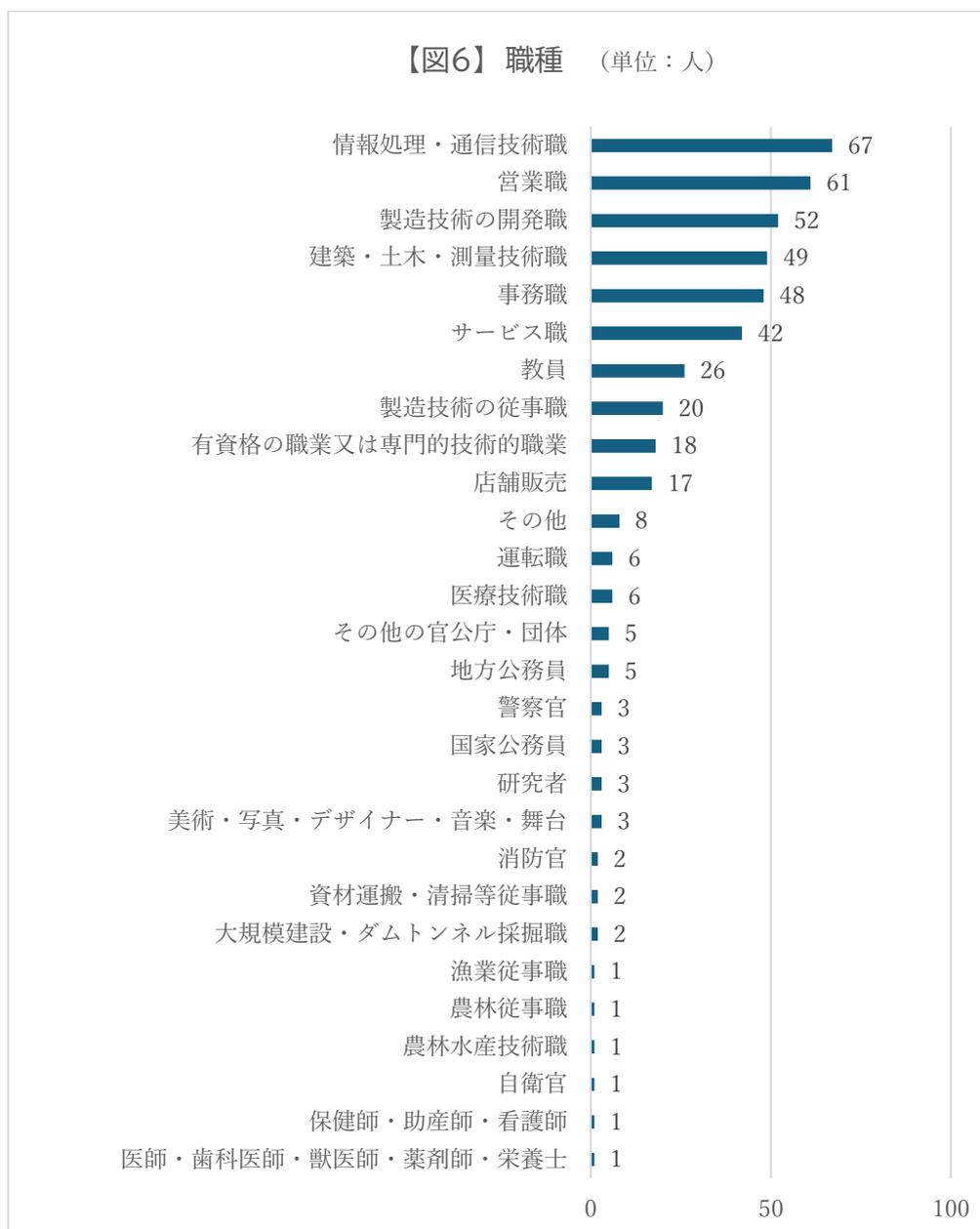
### 4. あなたの業界を教えてください。



#### 【考察】

上位1～3位の業種は、過去2年間と同じ結果となりました。その他の業種についても概ね大きな順位変動はありませんが、「専門・技術サービス業」の順位が上昇した（24年度：6位→25年度：4位）一方、官公庁・団体が24年度4位から25年度は7位とやや順位を下げた結果となりました。

## 5. あなたの職種を教えてください

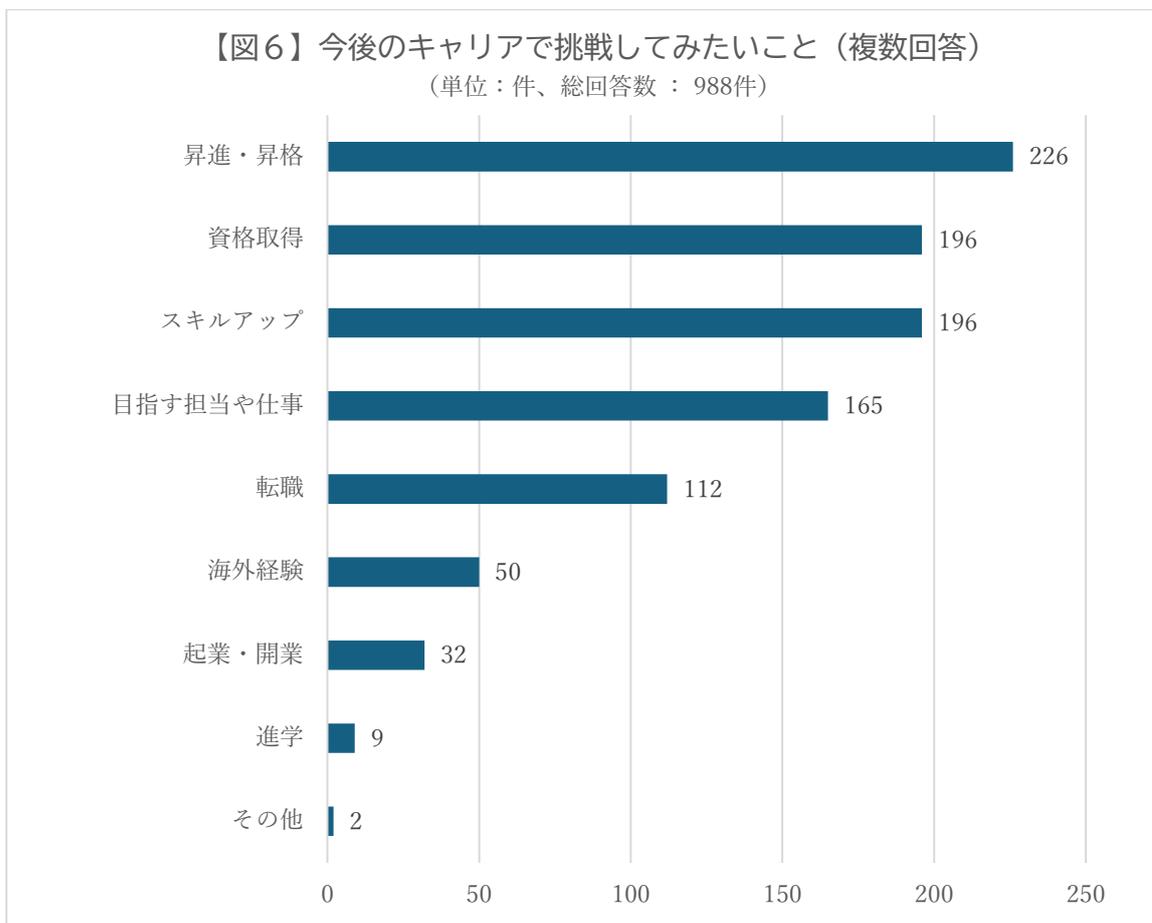


### 【考察】

職種別の構成割合については、昨年度に最も多かった「営業職」に代わり、今年度は「情報処理・通信技術職」が最多となりました。次いで「営業職」、さらに「製造技術の開発職」の割合が増加する結果となりました。

回答者の6割が理系学生であるという属性の影響は考えられますが、近年のDX化の加速に伴い、文系・理系を問わず「専門的な技術を身につけたい」という専門職志向が学生の間で強まっていること、また、企業側においても業種を問わず技術・IT人材の採用枠を拡大しているという構造的な変化が、職種の構成比に反映されたものと考えられます。また、昨年度3番目であった「事務職」が5番目へと減少している点は、企業における業務の自動化・効率化が進み、従来の事務領域がIT職や専門職へとシフトしている社会背景が影響していると推察されます。

## 6. 今後のキャリアで挑戦してみたいことはありますか？



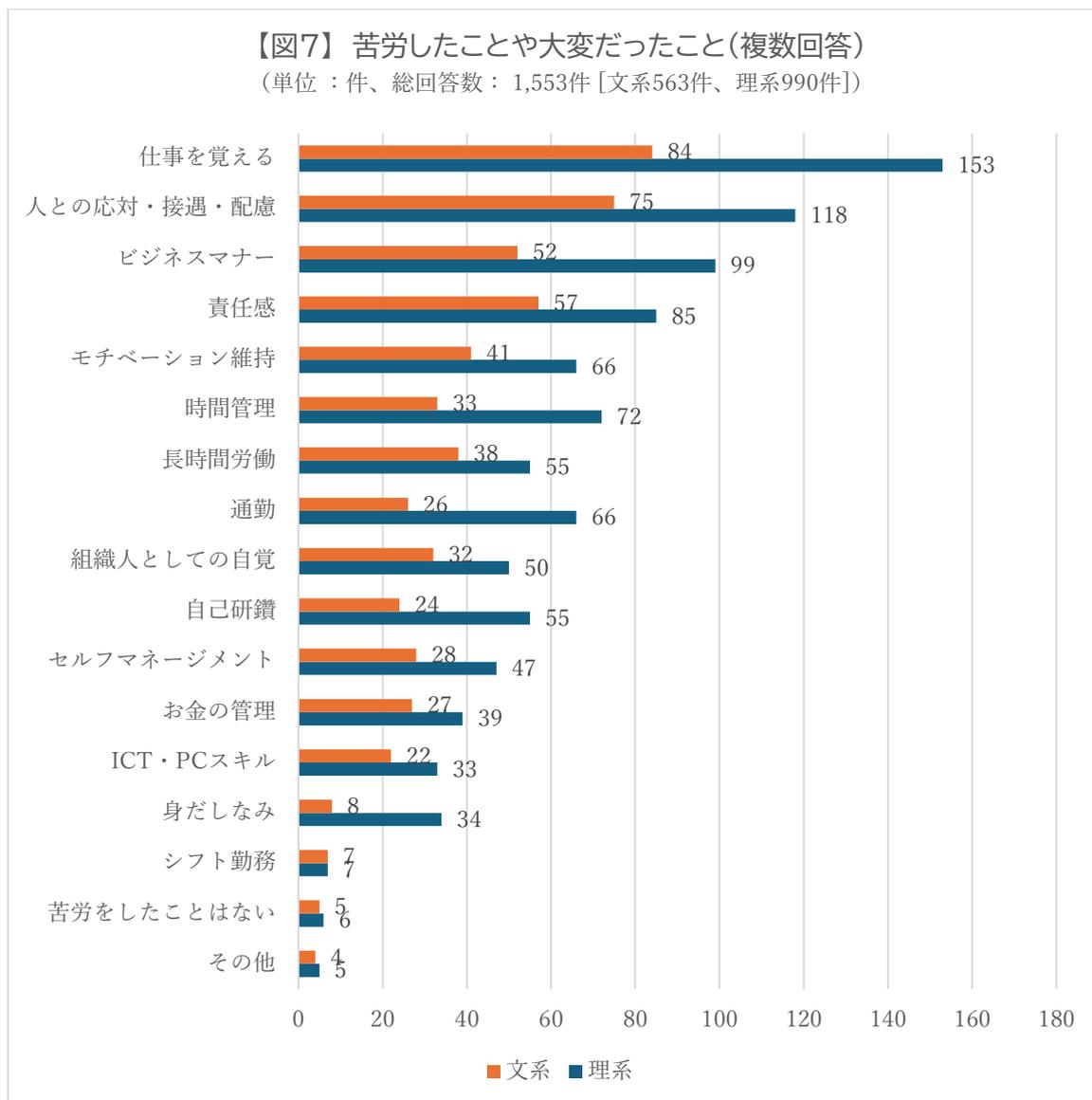
### 【考察】

今後のキャリアにおいて挑戦したいことの上位3項目は、昨年度と同様に「昇進・昇格」「資格取得」「目指す担当や仕事」となり、社会人としての高い成長意欲が維持されています。

特筆すべきは、順位は変わらないものの、3番目の「目指す担当や仕事」と回答した割合が増加している点です（24年度：14.8%→25年度：16.7%）。これは、組織内での昇進といった一般的な目標に加え、「どのような実務を経験し、何のスペシャリストを目指すか」という具体的な職務内容へのこだわりが強まっていることを示唆しています。

この傾向は、前述の職種構成において「情報処理」や「製造技術の開発職」といった専門職種が増加している点とも共通しています。背景には、ジョブ型採用の浸透やキャリアの早期化に伴い、学生側が「会社名」以上に「仕事の専門性」を重視する傾向が強まっていることが推察されます。特定のスキルを早期に身につけることで自らの市場価値を確立したいという、現代の若年層特有の合理的かつ主体的なキャリア観が、職種選択とキャリア目標の両面に一貫して表れたものと考えられます。

## 7. 大学生から社会人になって、苦労したことや大変だったことは何ですか？



### 【考察】

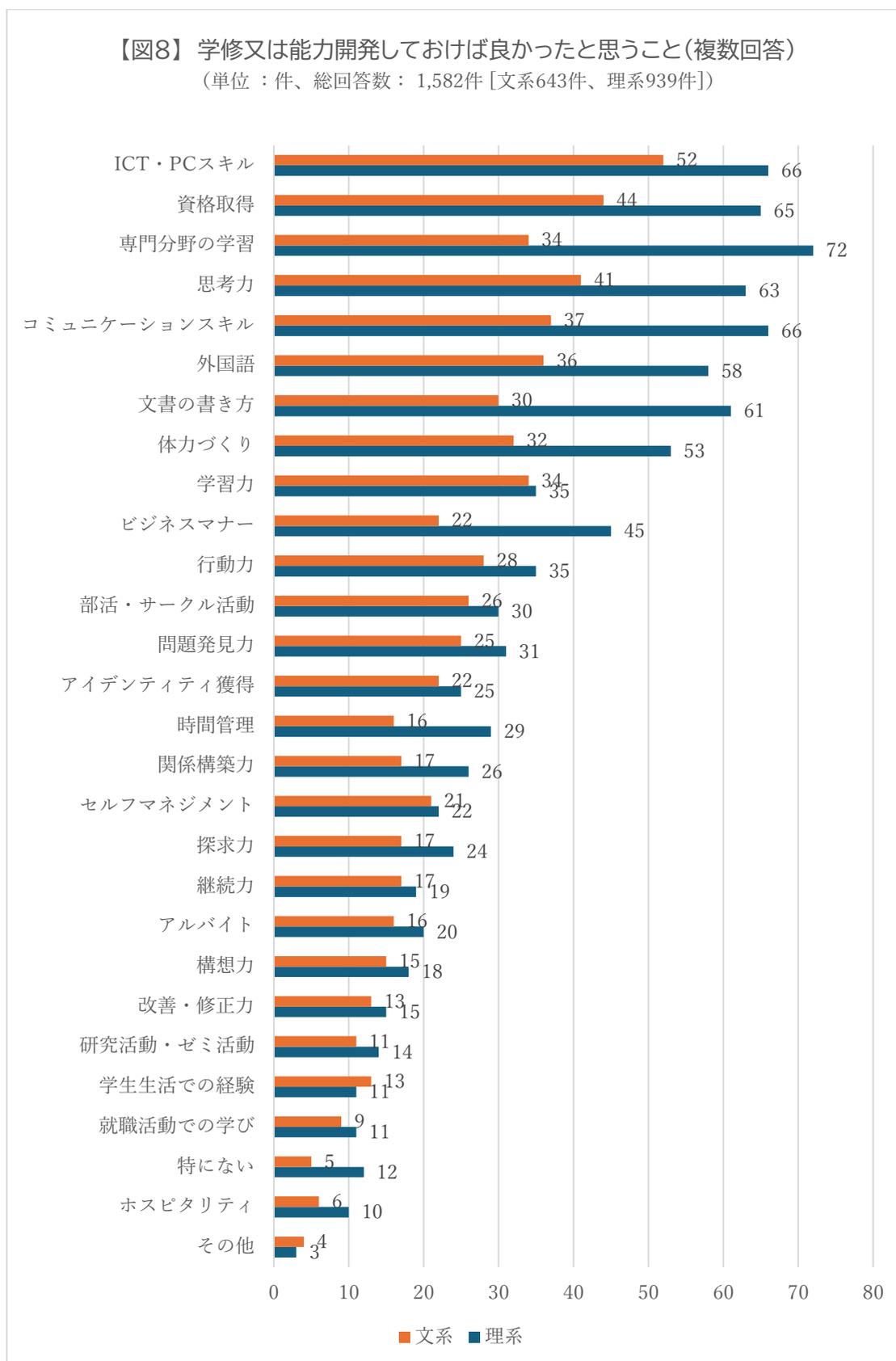
文系・理系ともに「仕事を覚えること」と「人との応対・接遇・配慮」が挙げられ、対人関係と実務スキルの習得が初期の課題となっていることが把握できます。

また、「ビジネスマナー」が昨年度と比較して上位にきており、社会人としての基礎的な振る舞いやルールを身につけることに多くの新入社員が重点を置いている傾向が見られます。

昨年度上位だった「責任感」については、文理で見ると、文系が3番目、理系が4番目となります。理系学生に専門職志向が強いという傾向は、これまでの設問からも見てとれますが、特定の技術や業務の遂行に集中する一方で、組織全体における広範な責任については、今後の実務経験を通してより深く理解していく段階にあると推察されます。

これらの結果から、新社会人に対しては、マナーの形式的な側面だけでなく、その背後にある他者への配慮や仕事に対する責任の重要性を、大学でのキャリア教育や入社後の研修で伝えていくことがより一層求められていると言えます。

8. 社会人になってから大学生時代に学修又は能力開発しておけば良かったと思うことは何ですか？



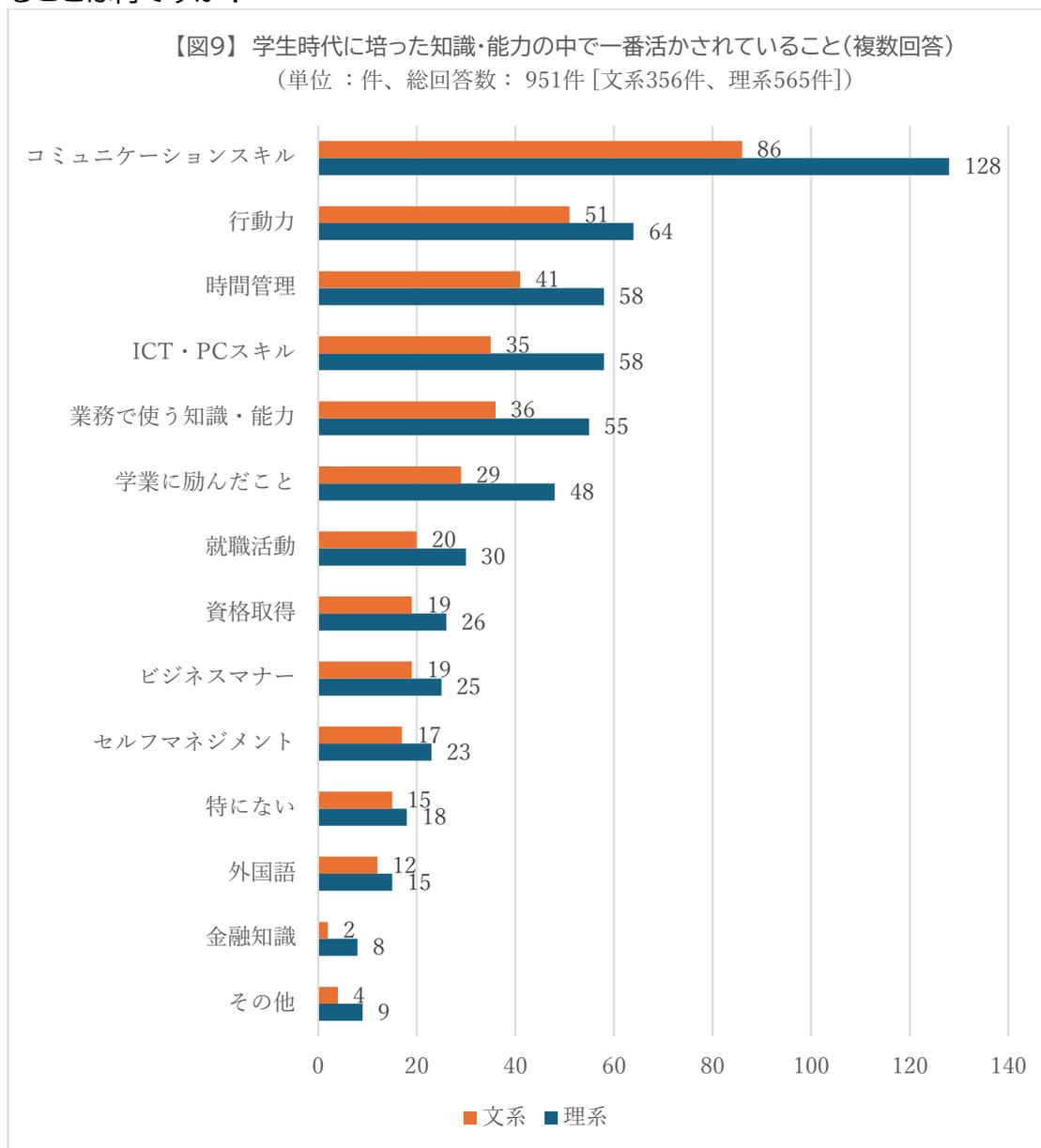
## 【考察】

今年度は「ICT・PCスキル」に続き、「資格取得」「専門分野の学習」が上位を占めました。特に理系では「専門分野の学習」が最多となっています。これらの項目が上位にあることは、前述の職種構成における「情報処理・通信技術職」「製造技術の開発職」等の技術系職種の構成比上昇や、将来「目指す担当や仕事」への関心が高まっている点とも、一貫した傾向を示していると考えられます。自身の市場価値を客観的に証明できる「資格」や、代替不可能な「専門技術」を習得することが、将来のキャリア形成において不可欠であると捉える「専門職志向」を強めている様子が伺えます。こうした傾向は、むしろ文系学生においてより顕著に現れています。本設問において、文系学生の回答比率が「苦労したこと」の設問に比べて上昇している点は、特筆すべき結果です。専門分野が実務に直結しやすい理系学生に対し、文系学生の方が、実務を通じて「自身の専門性や客観的なスキル（ICT・資格等）」の必要性をより切実に感じ、在学中の具体的な学修不足として捉える傾向が強まっていることを示唆しています。

また別の側面として、「思考力」の回答割合が増加する一方で「コミュニケーションスキル」が後退している点は、本年度の大きな特徴です。「苦労したこと」で対人関係が上位にありながら、学習意欲が対人スキルに向かない背景には、苦手領域の克服よりも、「思考力」や「専門性」といった個人の資質を磨くことで、実務上の課題を解決したいという合理的な判断が働いている可能性が推察されます。

効率（タイパ）を重視し、「目に見える成果」を早期に求める傾向が、資格や専門性への集中として表れており、大学としては専門教育を深化させるとともに、文系学生に対しても低年次から「専門性の核」となるスキル習得を促すなど、社会で不可欠な対人スキルの重要性と併せて伝えていくことが今後の課題と言えるでしょう。

9. 大学生時代に培った知識・能力の中で社会人になってから一番活かされていると感じていることは何ですか？



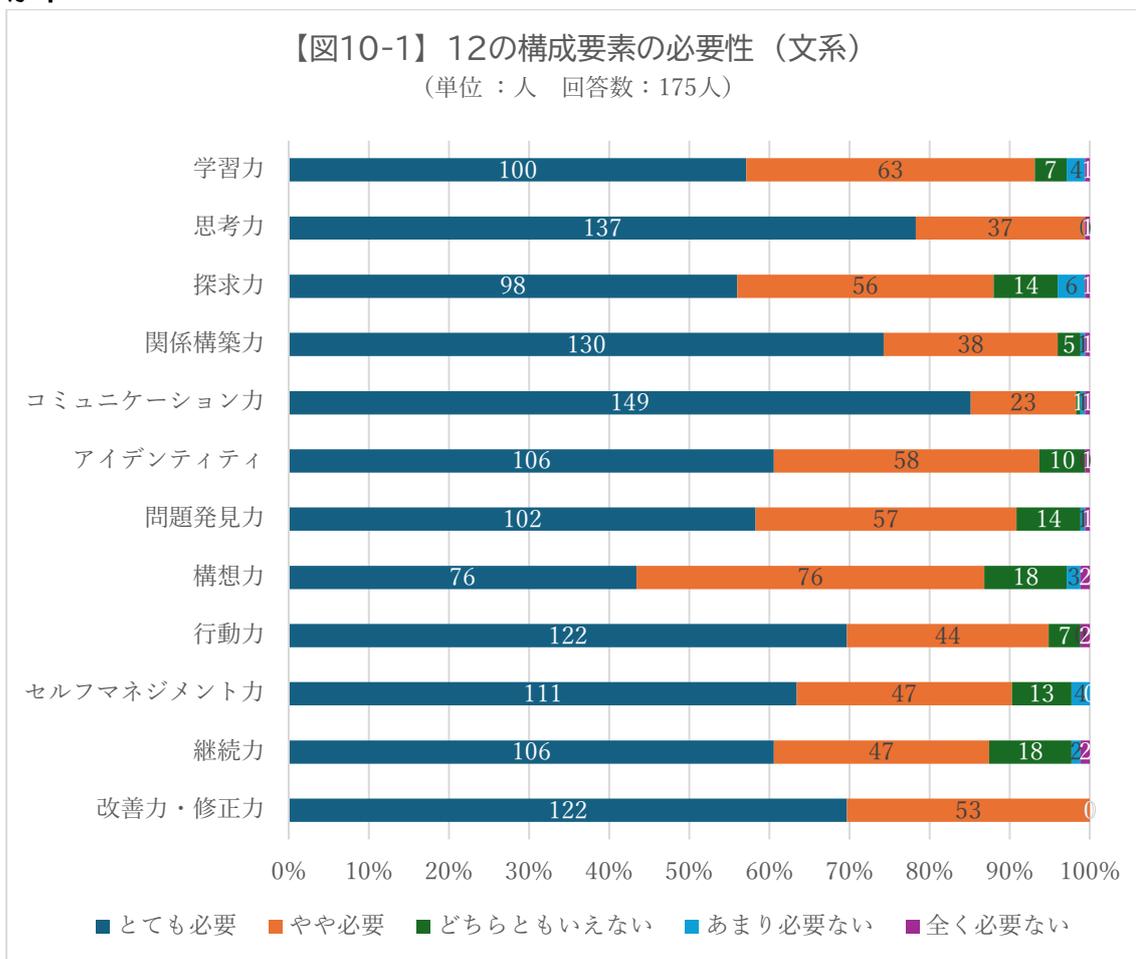
【考察】

昨年度同様「コミュニケーションスキル」と「行動力」が上位を占めました。卒業生の多くが、在学中の経験を土台として社会人生活をスタートさせていることが伺えます。

一方で、今年度の特徴的な変化として「時間管理 (タイムマネジメント)」が上位に浮上しました。これは、就職活動の早期化や多忙な学生生活の中で培われた「限られた時間でタスクをこなす力」が、実務において即戦力的なスキルとして結実していると推察されます。

注目すべきは、「コミュニケーションスキル」を自身の強みとして挙げている一方で、前述の『苦勞したこと』でも対人関係が上位にある点です。ここには、学生が自認するスキルと、実務で求められる「応対・接遇」の水準に乖離があるという、初期キャリア特有の課題が示唆されています。また、この領域への学修意欲が伸び悩んでいる点も含め、自己認識と実態のギャップをどう埋めていくかが、今後の支援における一つの視点となるでしょう。

10. 社会人基礎力を構成する「12の構成要素」は社会人生活において必要だと思いますか？



【考察】

社会人生活における各能力要素の必要性について、文系卒業生の9割以上が多くの項目を「必要」と回答する中、「探求力」「構想力」「継続力」の3項目が相対的にやや低い数値となりました。

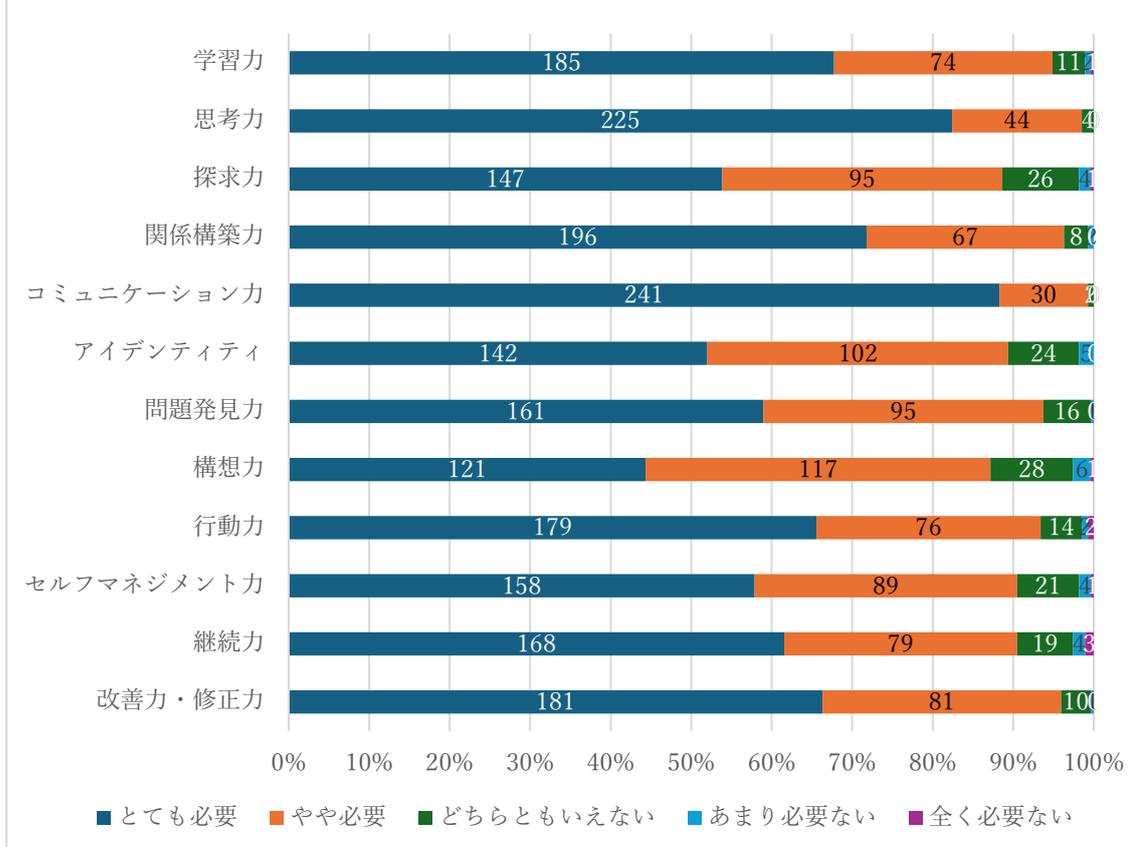
まず、例年低めに推移する「探求力（物事の本質を掘り下げる力）」や「構想力（課題解決の道筋を立てる力）」については、入社1年目の実務において、まずは「指示されたことを正確にこなす（実行力）」や「周囲と円滑に進める（チームワーク）」ことが最優先されるため、自ら枠組みを作る高度な思考スキルの必要性をまだ実感しにくい段階にあることが推察されます。

一方で、今年度9割を下回った「継続力」については、昨今の学生気質である「タイパ（時間対効果）重視」のキャリア観が反映されている可能性があります。一つの組織や職務に固執せず、自身の市場価値を高めるために柔軟に環境を変えていく「キャリア自律」の意識が高まっている中、従来型の「同じ場所で耐え忍び、継続すること」への価値認識が相対的に変化しているものと考えられます。

最短距離で成果や成長を求める合理的な姿勢が、特定の項目に対する必要性の判断に影響を与えている様子が伺えます。

【図10-2】 12の構成要素の必要性（理系）

（単位：人 回答数：273人）



### 【考察】

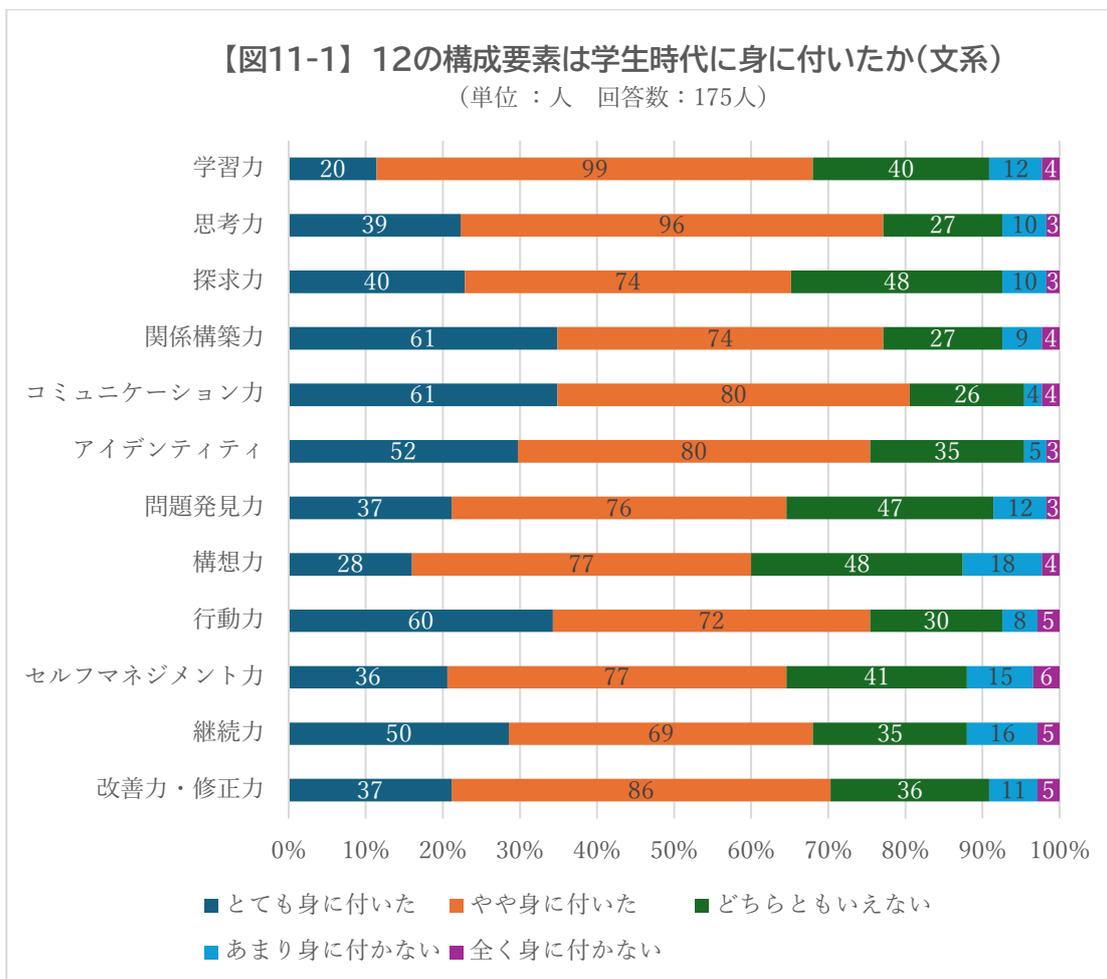
理系卒業生の結果において、「探究力」「構想力」「アイデンティティ獲得（自分らしさの確立）」の3項目が9割を下回りました。文系では「アイデンティティ獲得」の必要性が高く認識されている（9割以上）点と比較すると、理系特有のキャリア観が浮き彫りになります。

文系学生は、具体的な専門スキルが定義されにくい職務に従事することが多いため、仕事を通じて「自分らしさ」や「個人の持ち味」を確立することに成長の拠り所を求める傾向があります。対して理系学生は、これまでの調査で一貫して示されている通り、自身の価値を「保有する技術や知識」に置く「専門職志向」が非常に強固です。

彼らにとっての自己確立とは、内面的な「自分らしさ」を模索することよりも、現場で通用する「客観的な専門スキルを習得すること」そのものを指しています。そのため、入社1年目の技術習得フェーズにおいては、抽象的なアイデンティティという言葉の必要性を実感しにくい状況にあると推察されます。

また、昨年度9割に届かなかった「継続力」や「セルフマネジメント力」が、今年度はわずかに9割を超えた点については、技術習得には一定の時間と自己管理が必要であるという実務の実感が、評価を押し上げたと捉えられます。総じて、理系卒業生は内面的な探求よりも「実務に直結する具体的・客観的な能力」を優先する、一貫した合理的な姿勢を維持していることが伺えます。

11. 前の設問でお聞きした能力は、本学在学中にどのくらい身につきましたか？



【考察】

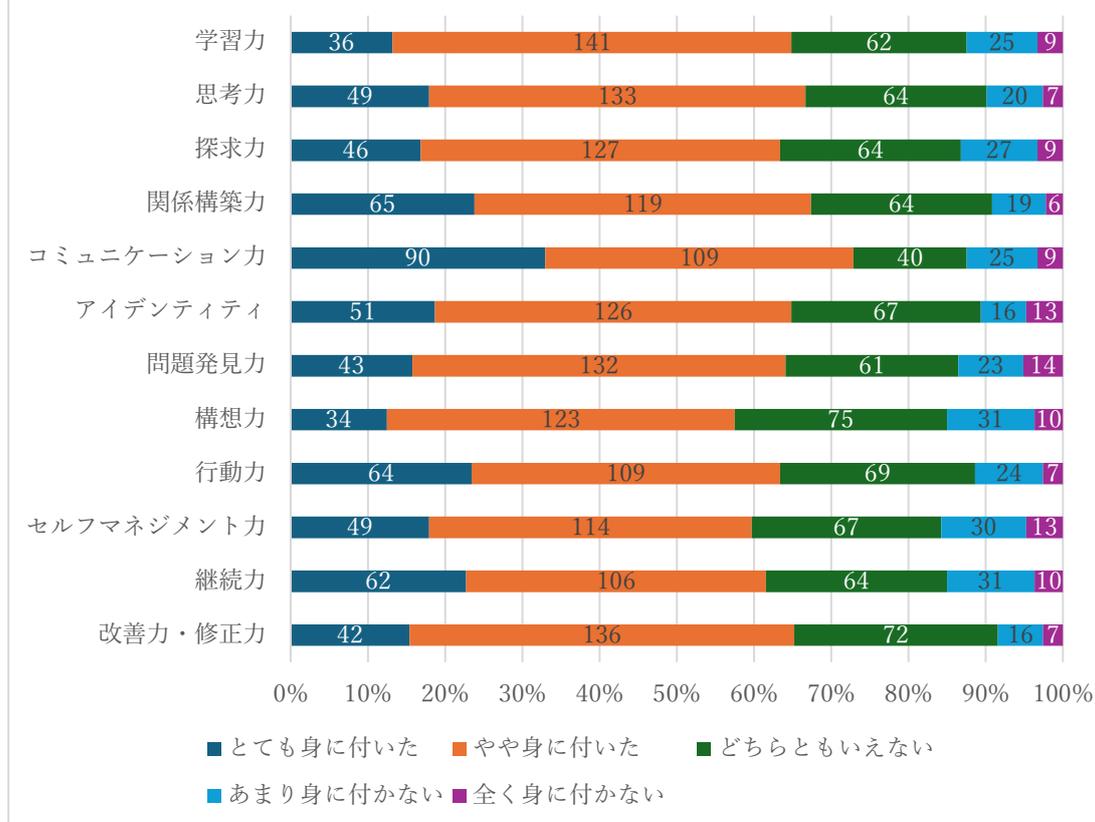
在学中の修得実感において、7割以上の学生が「身についた」と回答した項目は「思考力」「関係構築力」「コミュニケーション力」「アイデンティティ」「行動力」「改善力・修正力」の6項目となり、昨年度の4項目（思考力、関係構築力、コミュニケーション力、継続力）から拡大しました。コロナ禍後の活動制限緩和により、対面での試行錯誤や実践的な経験を積む機会が増えたことが、自己認識の向上に繋がったと推察されます。

一方で、「構想力」「問題発見力」「探求力」については、昨年度同様に修得実感が低い点は注視すべき課題です。背景には、効率（タイパ）を重視し、既存の正解を求める学修スタイルが定着したことで、ゼロから論理的な枠組みを設計する経験が不足していることが考えられます。

これらの項目の修得実感を高めるためには、単なる知識伝達型の講義に留まらず、不透明な課題に対して自ら仮説を立て、論理的に解決策を組み立てるPBL（課題解決型学習）や卒業論文指導の更なる充実が不可欠です。また、これまでの考察で示された「専門性志向」を活かし、特定の専門知を用いて社会課題を「構成」するワークショップ等、学生の関心に寄り添った実践的なトレーニング機会を増やすことが有効な対策と考えられます。

【図11-2】 12の構成要素は学生時代に身に付いたか(理系)

(単位：人 回答数：273人)



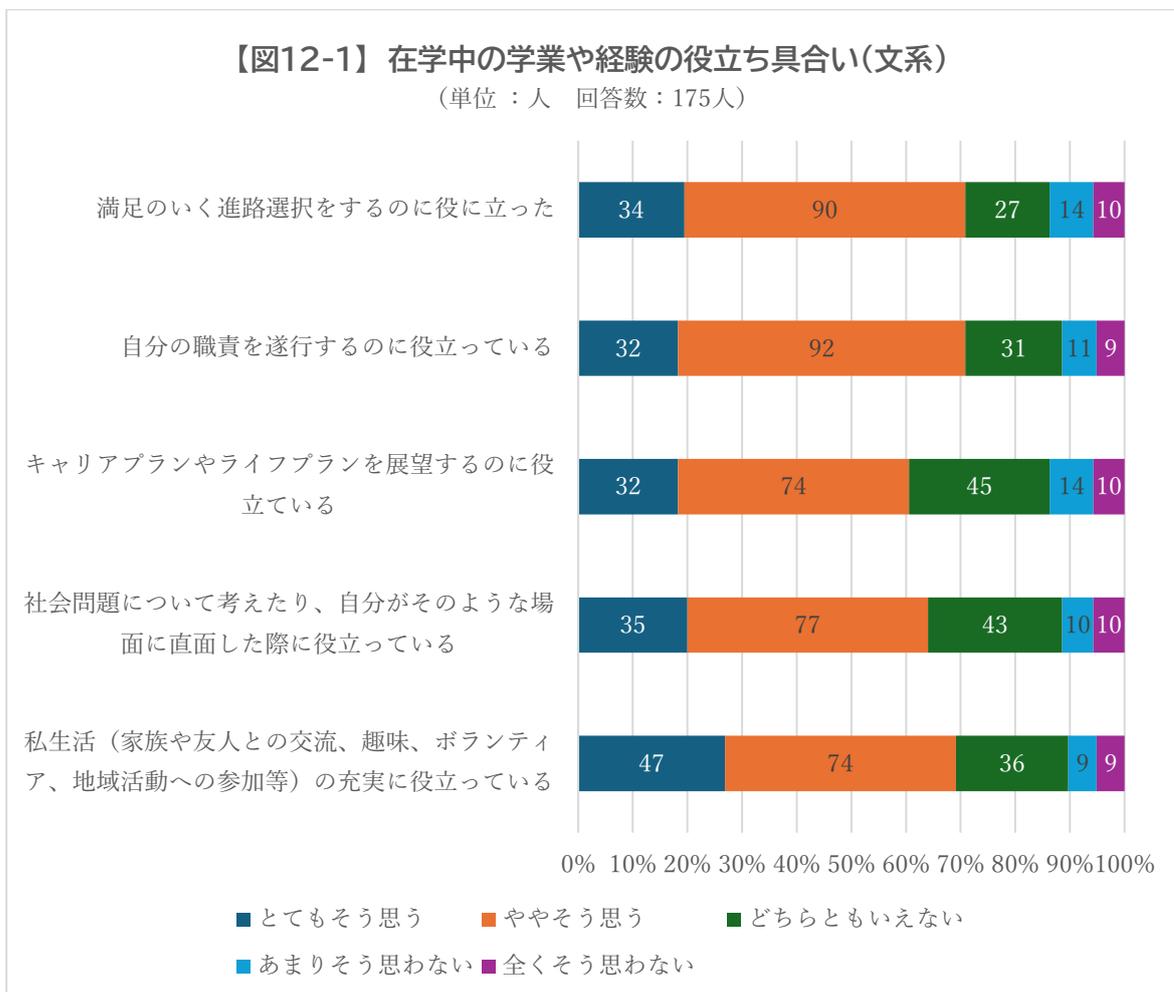
【考察】

理系卒業生の修得実感については、7割を超えた項目が「コミュニケーション力」のみに留まりました。昨年度は「思考力」や「関係構築力」等もわずかながら7割を超えていましたが、今年度は全体的に慎重な自己評価となっている点が特徴的です。

特に「構想力」は約58%と大幅に低下(24年度：約63%)している点は重く受け止めるべき課題です。背景には、これまでの考察で見てとれた理系学生の「強い専門職志向」が、特定の技術や知識の習得(インプット)に強く偏り、それらを組み合わせて新しい仕組みや解決策を設計する「アウトプットの経験」が不足している可能性が推察されます。また、就職活動の早期化やタイパ重視の傾向により、時間をかけて一つの課題を多角的に構成・設計するゆとりが、在学中の研究活動等において減少している懸念もあります。

今後の対策としては、専門分野の枠を超えた「分野横断型のプロジェクト学習」の導入が有効です。自らの専門知を「どう使うか」という出口戦略を立案する機会を増やすことで、設計能力の向上を図る必要があります。また、これまでの考察で示された「高い学修意欲」を活かし、専門技術を社会課題に接続するキャリア教育と専門教育の融合を加速させることが、構想力の修得実感の回復には不可欠であると考えられます。

## 12. 在学中の学業や経験は次のような場面でどのくらい役に立っていますか？



### 【考察】

在学中の学業や経験が「職責の遂行」に役立っているとする回答が7割を超える一方で、「キャリア・ライフプランの展望」や「社会問題への対処」については6割前後に留まっており、昨年度と同様の傾向が続いています。

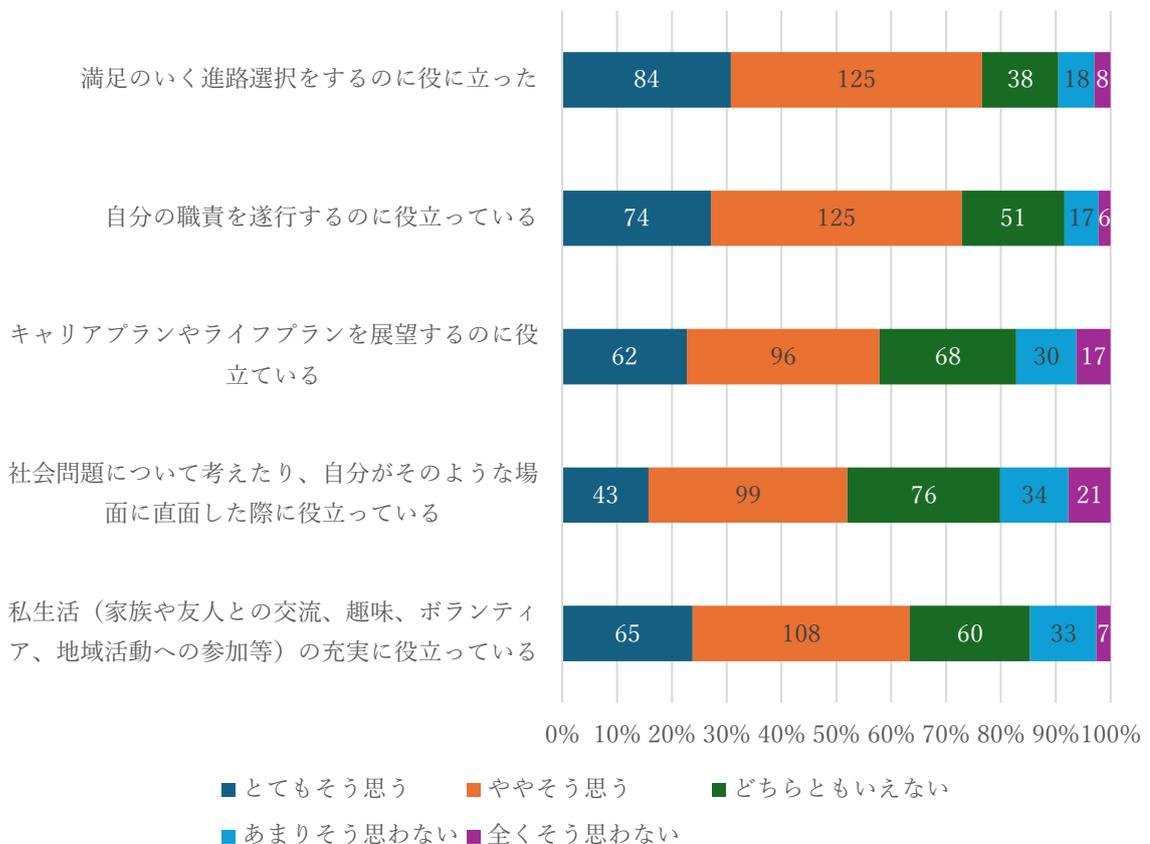
この要因として、これまでの考察でも指摘した「目先の専門性や実務スキルの習得」を優先する合理的な志向が挙げられます。文系卒業生にとって、入社1年目は現場での適応や具体的な職務遂行（ICTスキルや対人応対など）に意識が集中しており、より長期的・抽象的な視点を要する「ライフプランの展望」や「社会課題の自分事化」にまで意識を広げる余裕が、実務の場においてまだ生じていないことが推察されます。

また、タイパ（時間対効果）を重視する気質から、直接的な仕事の成果に結びつく経験を高く評価する反面、広範な教養や社会問題に関する学びを「実利的な価値」として認識しにくい現状も伺えます。

今後は、在学中の学びが単なる実務スキルに留まらず、自身の長期的なキャリア形成や社会参画の「指針（羅針盤）」として機能するよう、低年次からのキャリア教育において、実務と社会の繋がりをより具体的に提示していく必要があると考えられます。

【図12-2】 在学中の学業や経験の役立ち具合(理系)

(単位：人 回答数：273人)



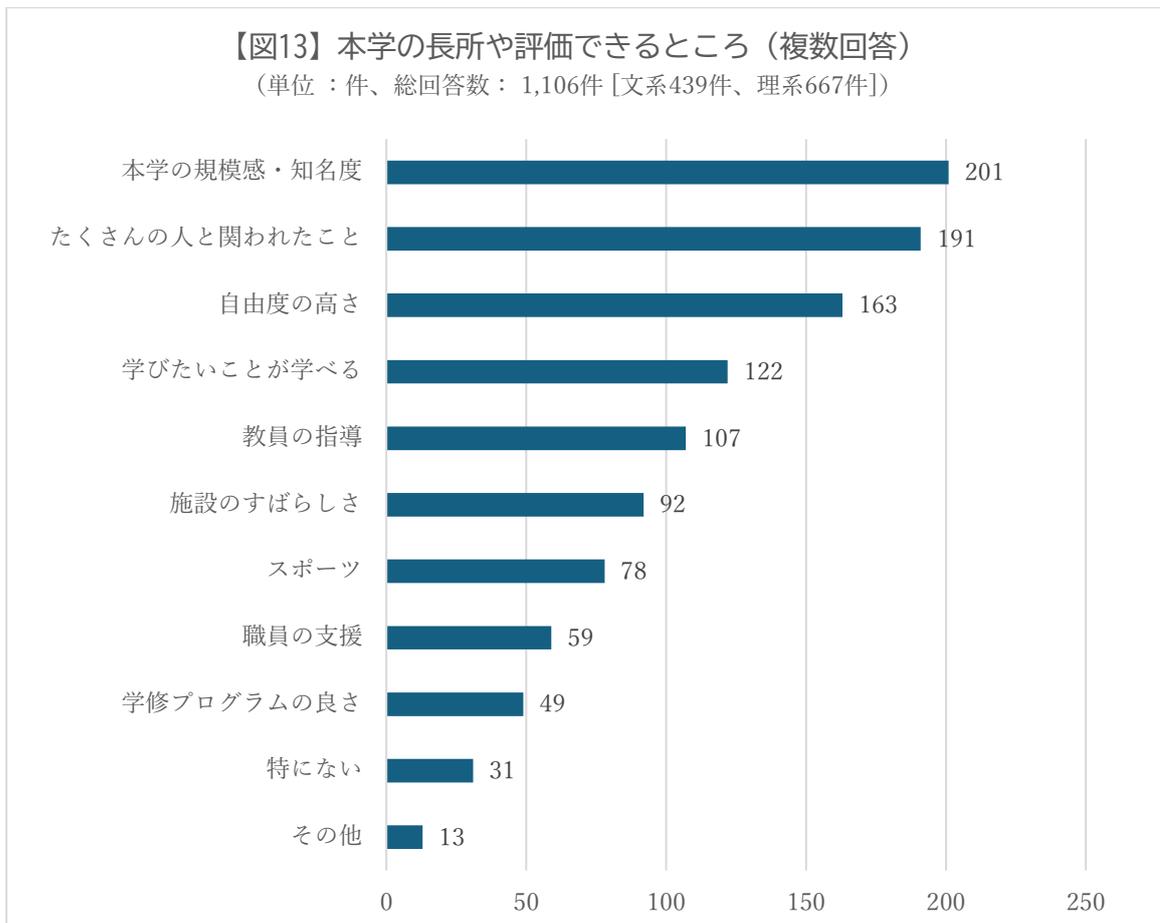
【考察】

理系卒業生の結果においても、実務遂行への貢献が評価される一方で、長期的なライフプランや社会問題への活用実感が低いという、文系と同様の傾向が見られましたが、「満足のいく進路選択」に役立ったという回答が約8割に達している点は、理系の大きな強みです。これはこれまでの考察で示された、高い専門職志向に基づいて「自身の専門性を活かせる出口」を明確に見定めてきた結果と言えます。在学中の研究活動や専門教育が、自身のキャリアの第一歩（進路決定）における確固たる指針となったことが伺えます。

一方で、「社会問題への対処」への活用実感が5割に留まり、文系（6割）を下回っている点は、理系学生の「専門深化への極端な集中」の表れと推察されます。自身の技術や知識を「専門領域内の課題解決」に直結させる意識は非常に高い反面、それらが「社会全体の中でどのような意味を持つか」という広範な社会課題へと視野を広げる機会が、在学中・入社後ともに不足している可能性が示唆されます。

今後は、高い専門性を維持しつつも、自分の持つ技術が社会にどう貢献し、どのような影響を与えるかという「専門性と社会の接点」を意識させる教育を強化し、修得した知識や技術をより広いフィールドで活用できる素養を育むことが課題と言えるでしょう。

13. 本学の長所や評価できるところなどについて教えてください。



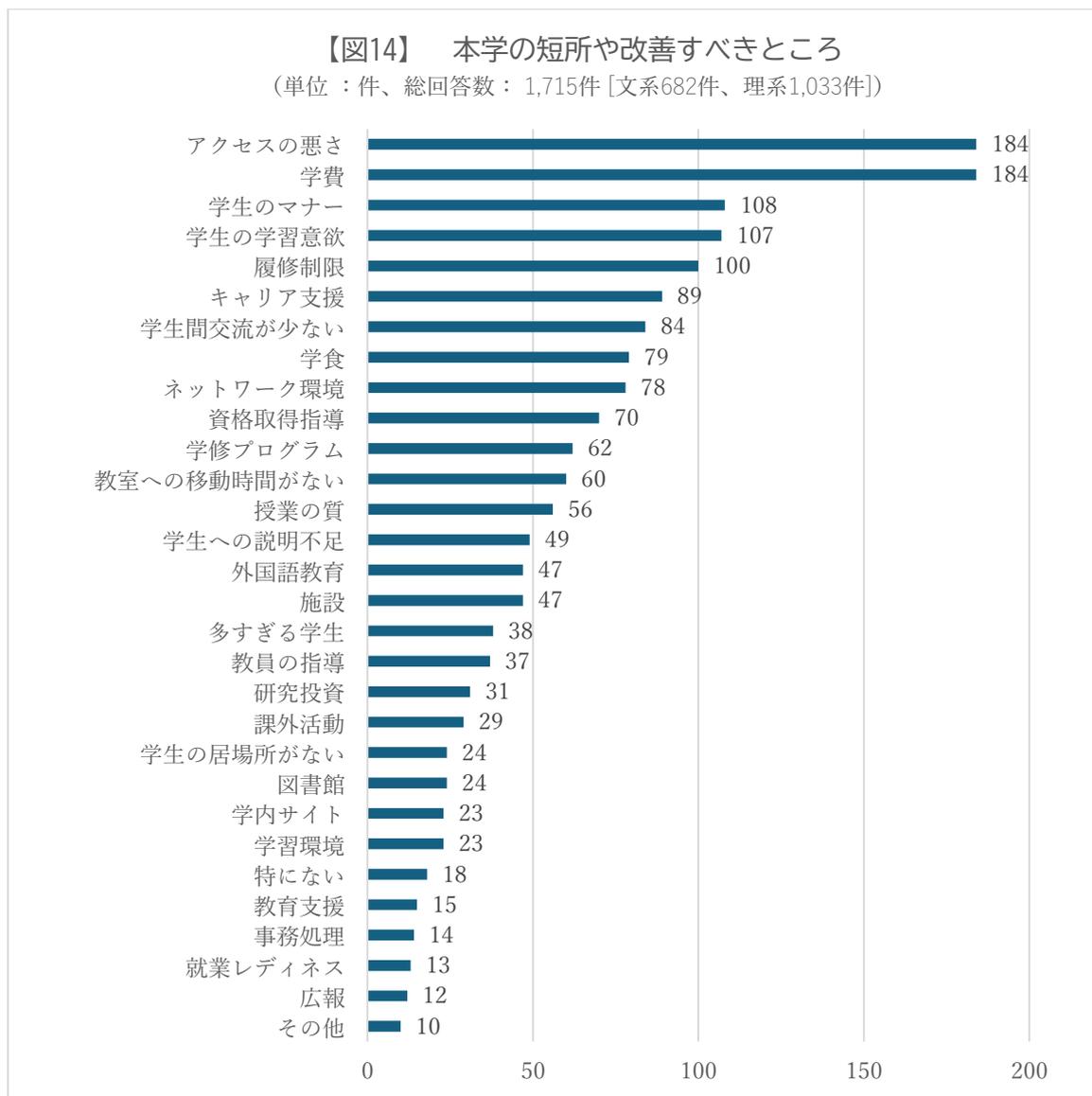
【考察】

本学の長所については、昨年度と同様に「規模感・知名度」「多様な人間関係」「自由度の高さ」「学修環境」「教員の指導」が高い評価を得る結果となりました。これは、日本有数の総合大学である本学の「スケールメリット」が、卒業生の満足度に大きく寄与していることを示しています。

特に「たくさんの人と関わったこと」や「自由度の高さ」が上位に挙げられている点は、広大なキャンパスと多様な学部学科を有する環境が、専門分野の枠を超えた交流や、自らの興味関心に応じた主体的な学びを可能にしていることの証左と言えます。卒業生は、本学のブランド力（知名度）を社会人としての自信の拠り所としつつ、在学中に培った幅広い人間関係や多角的な視点を、実務における「関係構築力」や「適応力」の源泉としてポジティブに評価していることが伺えます。

また、「学びたいことが学べる」環境や「教員の指導」への評価が維持されている点は、前述の考察で示された「高い学術的専門性への志向」を支える教育基盤が、全学的に機能していることを裏付けています。総合大学ならではの多様性と、専門教育の質が両立している点こそが、本学の揺るぎないアイデンティティであると再確認できる結果となりました。

14. 本学の短所や改善すべきところなどについて教えてください。

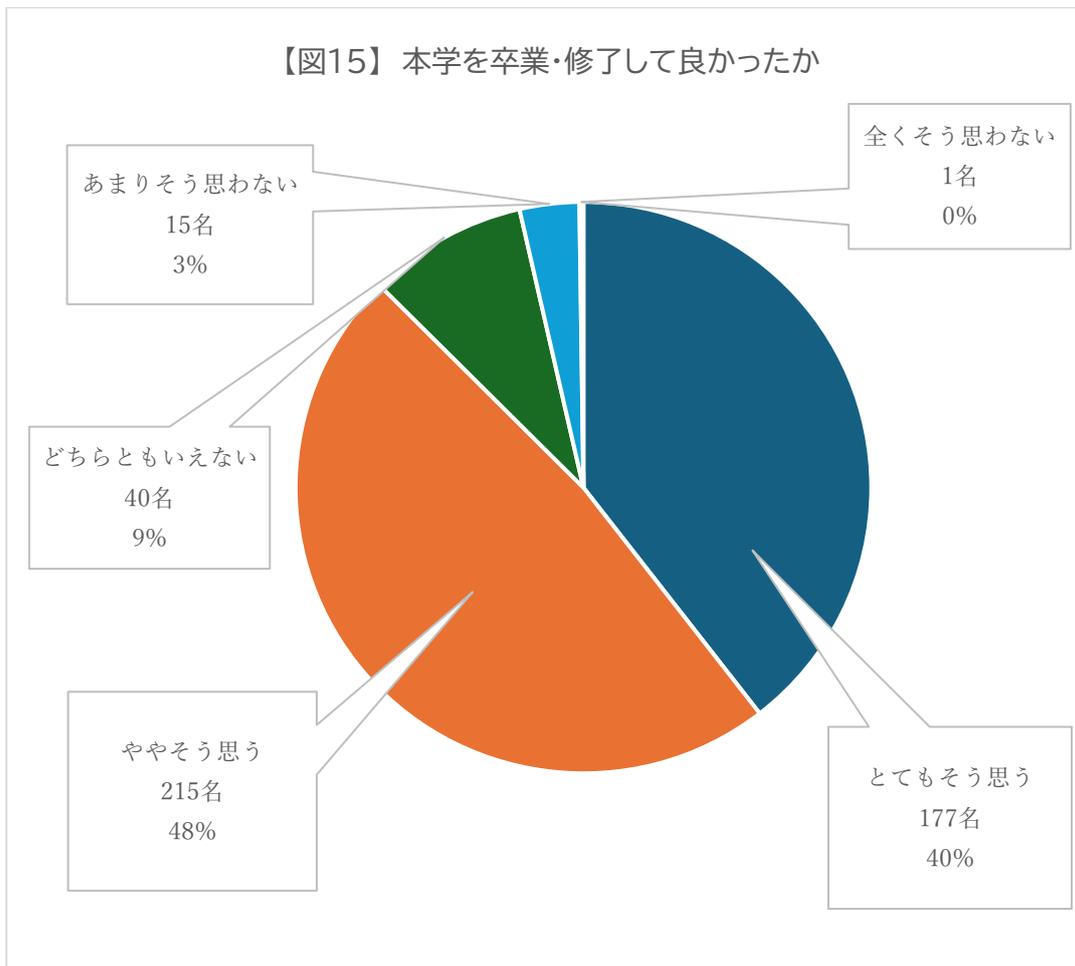


【考察】

「学費」と「アクセスの悪さ」は昨年度と変わらず上位となりましたが、今年度は学生の質に関する項目が目立つ結果となりました。特に「学生のマナー」は昨年度の6番目から3番目へと上昇し、「学習意欲の低さ」への指摘も続いています。この背景には、これまでの設問で見られた卒業生の「高い専門職志向」や「効率（タイパ）重視」の姿勢が関係していると推察されます。自律的に学ぼうとする学生が増えているからこそ、周囲の学生の振る舞いや意欲の低さが、自身の学びを阻害する要因として、よりネガティブに捉えられている可能性を示唆しています。

また、「履修制限」への不満も昨年度の8番目から5番目へと上昇しました。学びたいことが明確な学生にとって、制度上の制限が学術的な専門性を高める妨げになっているという不満の表れと言えます。「キャリア支援」は6番目と昨年度5番目より微減傾向にありますが、依然として入社後のミスマッチを訴える声は根強く、学生の主体的な学修意欲に応える環境整備と、より実効性の高いキャリアサポートが喫緊の課題となっています。

15. 総合的に考えて、本学を卒業・修了して良かったと思いますか？



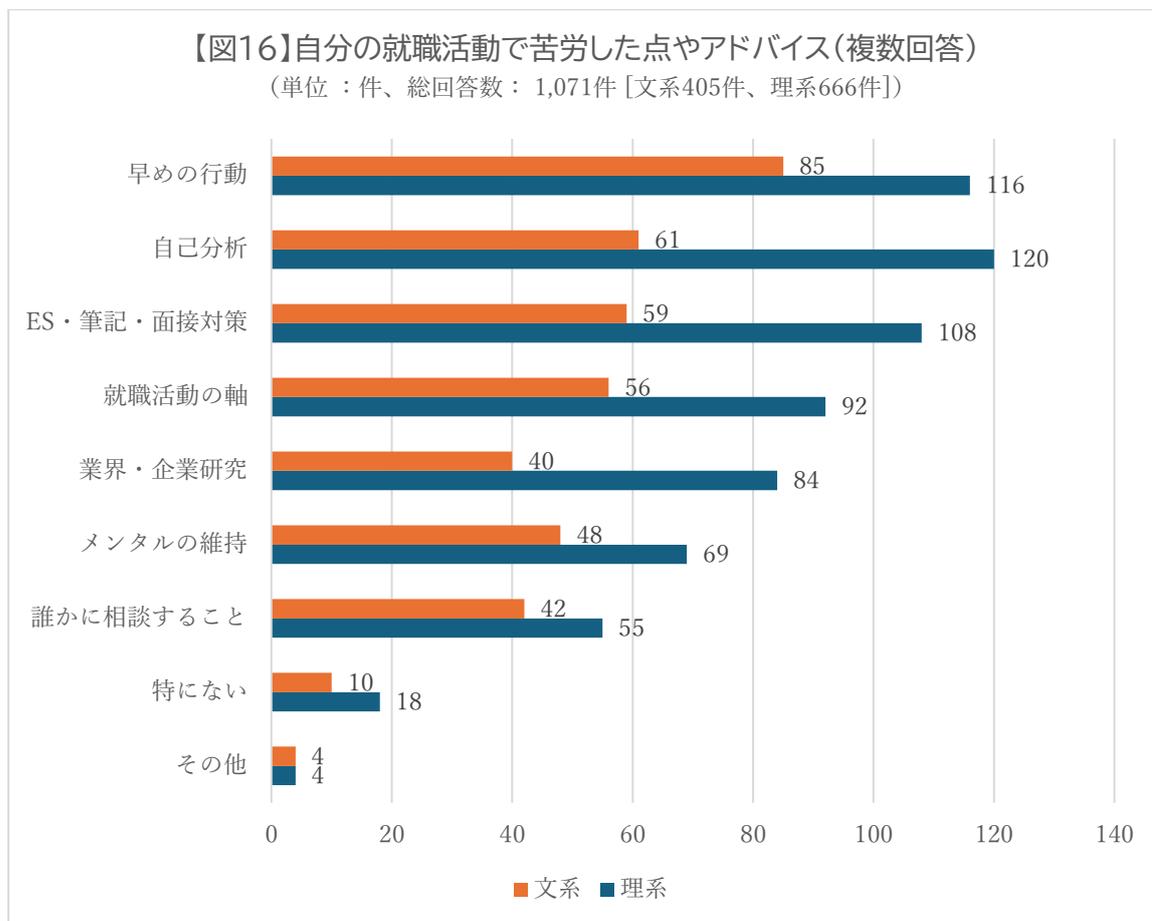
【考察】

「とてもそう思う」「ややそう思う」とする回答の合計で88%に達し、昨年度と全く同水準を維持している点は、社会人1年目を迎えた卒業生の本学に対する評価が極めて安定していることを示しています。

これまでの設問では、入社初期の「ミスマッチ」や「人との応対・接遇」への苦勞、学内環境への一部の不満なども見受けられました。しかし、それら個別の課題がありながらも、最終的な満足度が揺るがない背景には、前項で長所として挙げられた「日本有数の総合大学としてのスケールメリット」や「知名度」が、社会人としてのアイデンティティや自信の支えとなっていることが推察されます。

実務の場において、本学で培った「多様な人間関係」や「行動力」が活用実感として結実していることが、卒業後の自己肯定感や母校への帰属意識に直結していると言えます。今後もこの高い満足度を維持しつつ、これまでの考察で浮き彫りになった「自己認識と実務のギャップ」を埋める支援を強化していくことで、卒業生の満足度をさらなる「社会での活躍実感」へと昇華させていくことが期待されます。

## 16. 後輩のために、自分の就職活動で苦労した点やアドバイスをお願いいたします



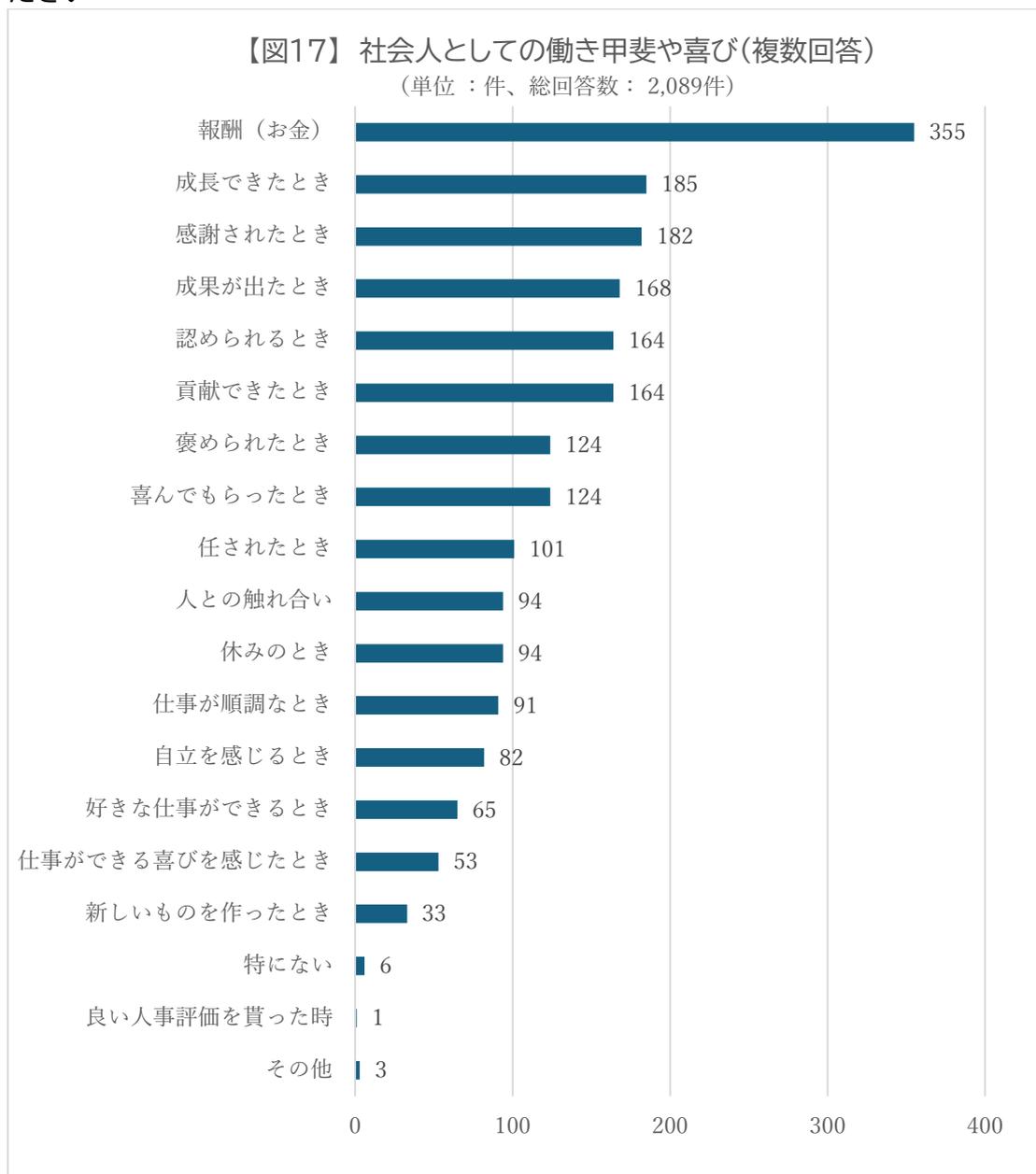
### 【考察】

「早めの行動」「自己分析」といった項目が例年通り上位を占める中、今年度は「業界・企業研究」が「メンタルの維持」を上回りました。

この背景には、本調査の冒頭で浮き彫りになった「入社後のミスマッチ」や「業務内容の相違による離職(3%)」という実態が関係していると推察されます。早期化する就職活動の中で、効率(タイパ)を優先して早期内定を得たものの、入社後に「社風や業務とのミスマッチ」に苦しんだ経験が、「表面的な対策だけでなく、組織の実態を深く知る(研究する)べきだった」という強い後悔と、後輩への切実な助言として表れたと考えられます。

卒業生は、単に内定を得るための「筆記・面接対策」よりも、入社後の定着や活躍を見据えた「質の高いマッチング」の重要性を、身をもって実感しています。大学としては、この卒業生の声を重く受け止め、低年次から「仕事のリアル」に触れる機会を増やすとともに、効率性のみに捉われない、本質的な企業研究の指導を強化していく必要があります。

17. 社会人としての働き甲斐や喜びはどんなことですか？後輩のために実体験を教えてください



【考察】

昨年度同様に「報酬(給与)」が最も多い点は、これまでの考察で示された「合理的・現実的なキャリア観」を象徴しています。彼らにとっての報酬は、単なる生活の糧だけでなく、自らのスキルや貢献に対する「客観的な評価指標」として重視されていると推察されます。

一方で、「褒められる」といった受動的な承認よりも、「成長」や「成果」が上位にある点は特筆すべき特徴です。これは、本調査を通じて浮き彫りになった「特定の専門性を身につけ、自律的に歩みたい」という強いプロフェッショナル志向が、仕事の喜びの源泉にも一貫して表れているものと言えます。

自身の能力向上(成長)が実利(報酬)や貢献(感謝)に直結している実感が、社会人1年目の困難を乗り越える最大の原動力となっていることが伺えます。

## IX. 総括(まとめ)

本調査の結果、2025年3月卒業生(入社10ヶ月時点)の離職率は3%と低水準にあり、母校への満足度も88%と高水準を維持しています。しかし、その詳細を分析すると、「高い専門職志向」と、実務における「対人認識のミスマッチ」という、現代特有の構造的課題が浮き彫りになりました。

### 1. 専門性を武器とする「自律的なキャリア観」の台頭

職種構成におけるIT・技術系職種の増加や、資格取得・専門分野への強い学修意欲、そして「担当業務」へのこだわり。これらの一貫した傾向は、組織に依存するのではなく、自らの専門スキルを武器に市場価値を高めたいという「プロフェッショナルな自律心」の表れです。効率(タイパ)を重視する彼らにとって、実学に基づいた「学術的な専門性」の修得こそが、社会で生き抜くための最大の盾となっています。

### 2. 深刻な「自己認識」と「実務(責任)」の乖離

一方で、共有すべき課題も確認されました。多くの卒業生が「コミュニケーション力」を自らの強みと自認しつつも、現場では「人との対応・接遇」に最も苦慮しています。学生時代の「仲間内での交流」をスキルと捉え、社会人に求められる「異質な相手との、責任を伴う情報伝達」を未知の領域としていた認識のズレが、入社後のミスマッチを引き起こしています。自身の強みが通用しない現実への心理的抵抗感が、対人スキルのアップデートではなく、正解がある「資格」等の領域への学修回避を生んでいる側面も推察されます。

### 3. 「質の高いマッチング」と「実践的スキルの修得」に向けた支援の強化

これらの課題を解決するためには、これまでの就職支援の枠組みを越えた、全学的なアプローチが不可欠です。

第一に、低年次から「仕事のリアル(責任や厳しさ)」に触れる機会を増やし、表面的な対策に留まらない本質的な業界・企業研究を促すことで、ミスマッチを未然に防ぐ「質の高いマッチング」を推進する必要があります。

第二に、学生が自信を持つ「専門性」を社会で活かすため、専門知を論理的に組み立てる「構想力」や、実務水準の「対応能力」を育む教育プログラムの充実が求められます。学部学科での専門教育において、その知識が社会のどのような場面で「責任」を伴って活用されるのか、より具体的な社会との接点を提示していくことが、学生の自己認識を正しくアップデートする鍵となります。

今回の調査で得られた「専門職志向の強まり」や「対人認識の乖離」といった鮮明なデータは、今後のキャリア教育および就職支援活動の質を向上させるための極めて重要な根拠となります。是非、本アンケート結果の内容を具体的な施策検討の材料として、幅広くご活用いただければ幸いです。